

あおり藍 コロナ予防に期待 エキスにウイルス侵入阻害成分／ 近大などチーム発見

2/10(木) 23:00 配信



抽出したエキスを新型コロナウイルスのヒト細胞侵入阻害成分があることが分かったあおり藍（近畿大学提供）

近畿大、東北医科薬科大、富山大、神戸大の4大学でつくる研究チームは10日、農薬不使用の青森県の天然素材「あおり藍」のエキスを、[新型コロナウイルス](#)のヒト細胞侵入を阻害する成分があることを発見したと発表した。新型コロナウイルス感染予防への活用が期待できるといい、「[点鼻薬](#)などの実用化に向けて研究を進めていく」としている。新型コロナウイルスは、ウイルスの表面にある「スパイクタンパク質」をヒト細胞表面の受容体に結合させてヒトの細胞に侵入する。研究チームは、蛍光物質で可視化したスパイクタンパク質を、培養した上皮細胞に添加する実験を実施。あおり藍の葉から抽出したエキスなど約10種類の天然物や化合物を加え、それぞれの反応を調べた。このうち、あおり藍のエキスを与えた細胞では、受容体に結合するスパイクタンパク質の量が著しく減少。結合を阻害することが分かったという。阻害効果は、あおり藍に多く含まれ、新型ではない既存のコロナウイルス増殖を[抑制](#)するとされる成分「トリプタンスリン」がもたらしているとみられる。しかし、トリプタンスリンのみを使った実験では、結合の減少量があおり藍の半分程度にとどまったため、あおり藍は同成分以外にも結合阻害成分を含んでいる可能性があることも分かった。研究は、2020年夏ごろから新型コロナウイルスのアルファ株を用いて実施。コンピューターシミュレーションによると、程度に差はあるがデルタ株やオミクロン株にも阻害効果を発揮するとみられるという。オンラインで記者会見した[近畿大学](#)医学部病理学教室の伊藤彰彦主任教授は「（コロナ感染）予防効果に期待しており、安価で手軽に使えるものにするのが良いと考えている。感染した後でも、初期であれば手当てにもなる」と話し、実用化に向け動物実験などを進めていく考えを示した。研究に協力した「あおり藍産業」（青森市）の吉田久幸社長は「あおり藍にはいろいろな可能性があると思っていたが、これほどの結果が出て期待と驚きが大きい。さらに研究が進み、みんなの役に立てればうれしい」と語った。研究チームの論文は同日（日本時間）、国際的な学術誌「[Experimental and Therapeutic Medicine](#)」に掲載された。